

# マサバ (対馬暖流系群) ①



## ■ マサバ対馬暖流系群の現在の状況

マサバは北太平洋に広く生息しており、本系群はこのうち東シナ海～日本海に分布する群れである。

図1 分布図

分布は東シナ海南部から日本海北部、さらに黄海や渤海にも及ぶ

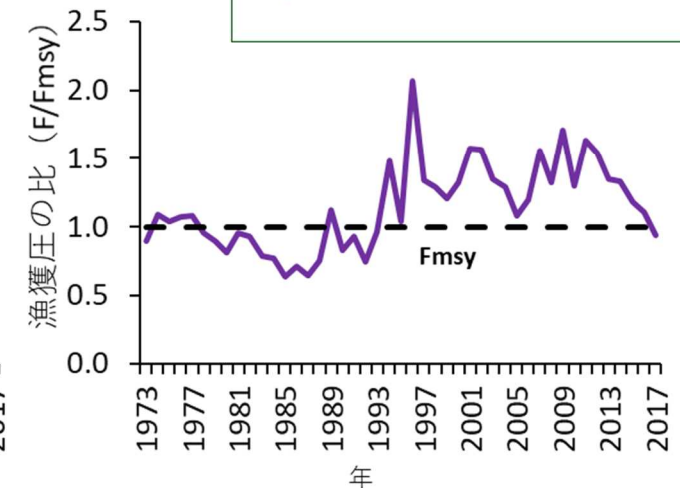
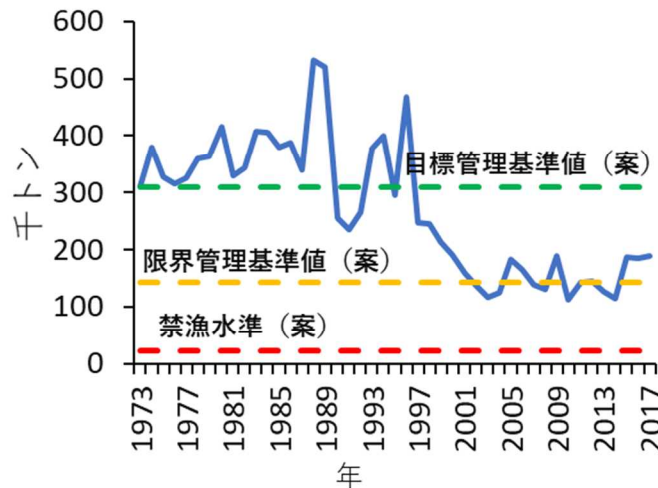
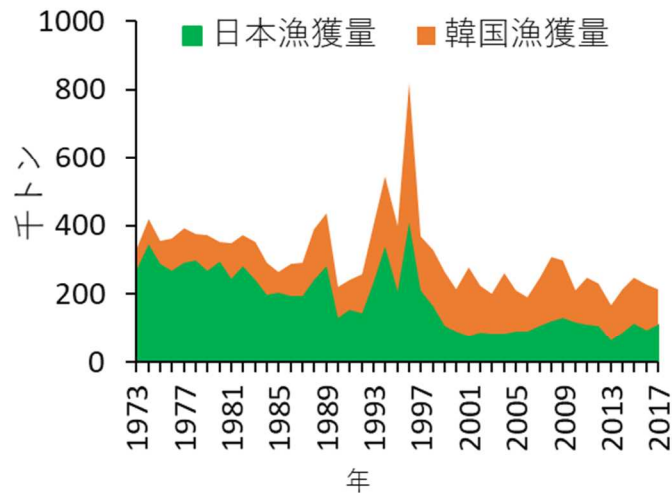
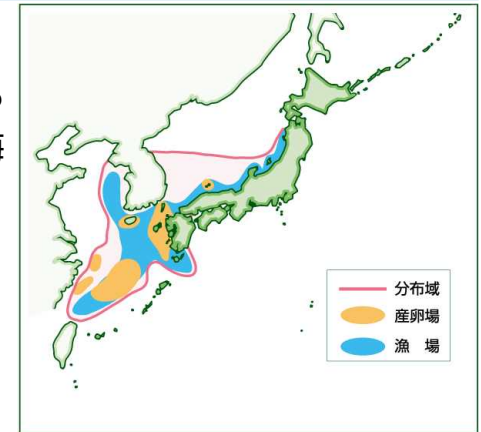


図2 漁獲量の推移

我が国の漁獲量（緑色）は、1970年代後半には300千トン前後であったが、2000年以降、概ね80千～120千トンの低い水準で推移している。2017年の漁獲量は110千トン（日韓合計215千トン）。

図3 親魚量の推移

親魚量は、1990年代までは概ね300千トン以上、2000年代以降は200千トン以下。2017年は目標管理基準値案を下回るが、限界管理基準値案は上回る。

図4 漁獲の強さの推移

本系群の漁獲圧（F）は、1994年以降においては最大持続生産量を実現する漁獲圧（Fmsy）を上回っていたが、2017年はわずかに下回った。

# マサバ (対馬暖流系群) ②

## ■ 管理基準値案と漁獲管理規則案

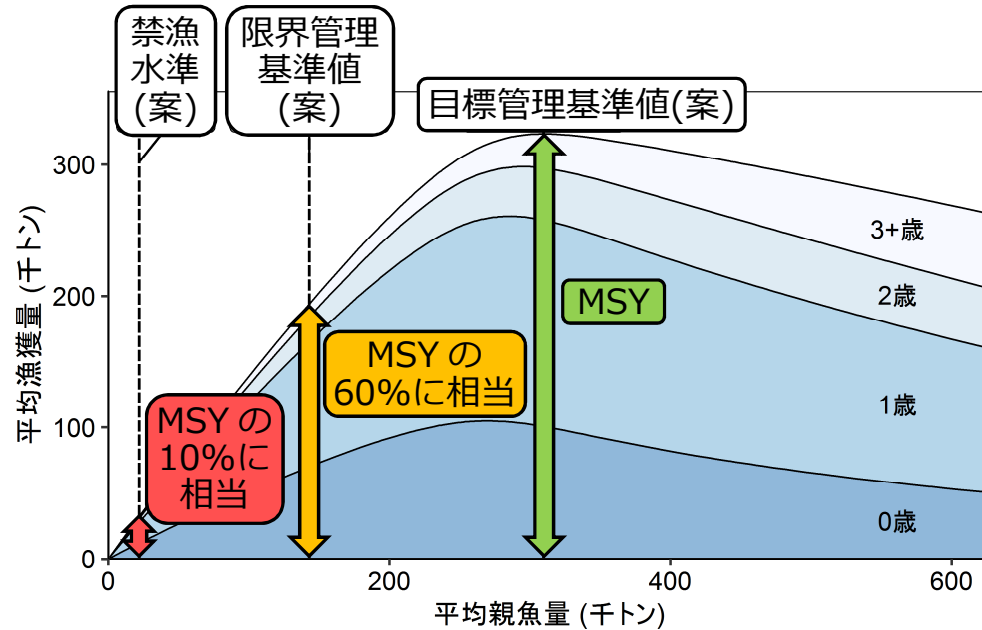


図5 MSYと管理基準値案の関係

本系群の目標管理基準値としては最大持続生産量 (MSY : 323千トン) が得られる親魚量 (SBmsy) を、限界管理基準値としてはMSYの60%が得られる親魚量を、禁漁水準としてはMSYの10%が得られる親魚量を提案する。

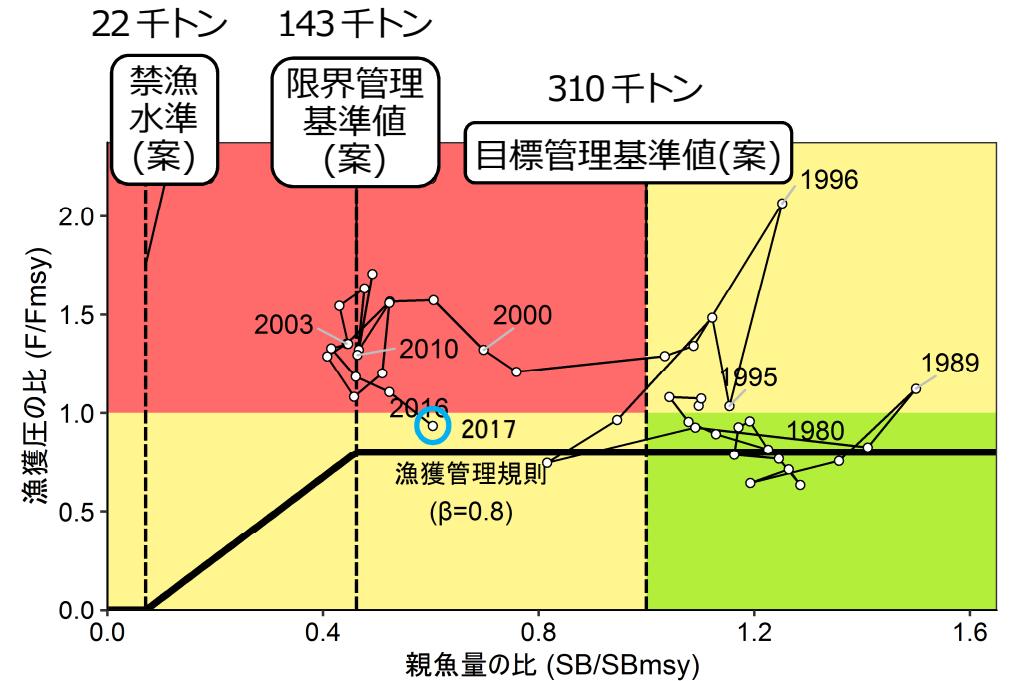


図6 神戸プロット (神戸チャート) と漁獲管理規則案

本系群は、2000年以降であれば、2017年を除き、漁獲圧 (F) は  $F_{msy}$  以上・親魚量は  $SB_{msy}$  未満の領域 (図の赤い範囲) にあった。 $\beta$  を 0.8 とした場合の漁獲管理規則案 (※) を黒い太線で示す。2017年のプロット (点) が黒い太線よりも上側に位置するため、2017年のFは、当該漁獲管理規則案に基づくFを上回っている。

※ $\beta$ や漁獲管理規則案については「検討結果の読み方」を参照

# マサバ (対馬暖流系群) ③

## ■ 将来の親魚量と漁獲量の予測

漁獲管理規則案 (現状の漁獲圧は参考) に基づいて算出

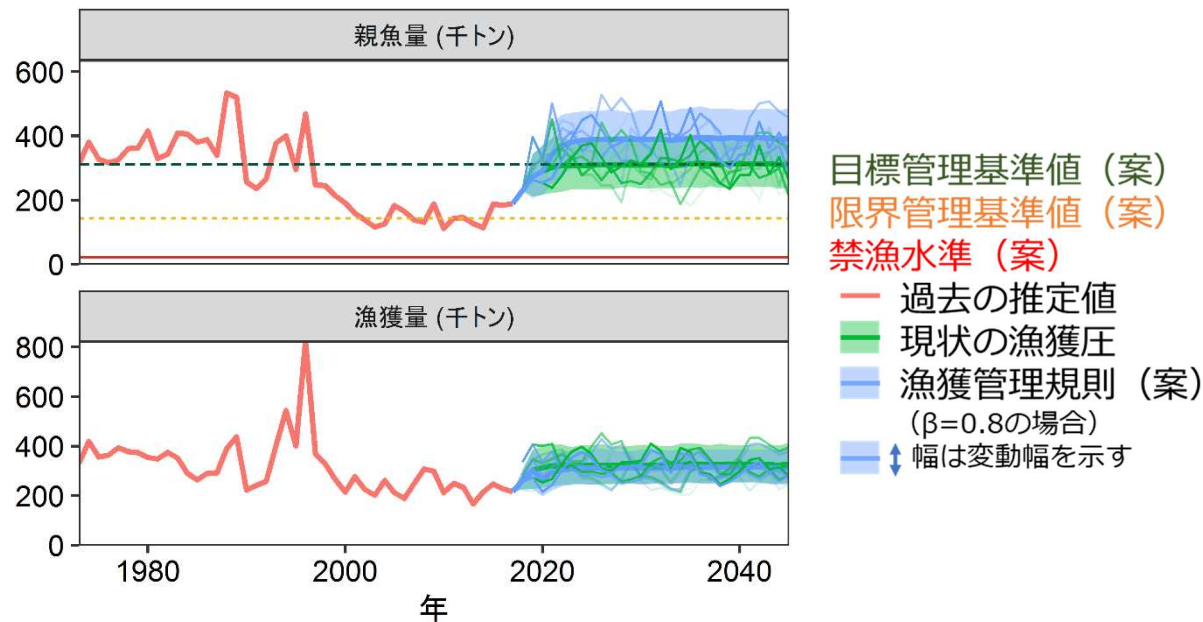


図 7 親魚量と漁獲量の将来予測

漁獲管理規則案に基づく、親魚量と漁獲量は平均的には増加し、 $\beta$  が 0.9 以下であれば、10 年後に目標管理基準値案を 50%以上の確率で上回る (表)。また、 $\beta$  が 1 以下であれば、限界管理基準値案以上の親魚量が維持される。

表 管理基準値案を上回る確率と 2020 年の漁獲量

$\beta$	10年後 (2030年) に親魚量が限界管理基準値 (案) を上回る確率 (%)	10年後 (2030年) に親魚量が目標管理基準値 (案) を上回る確率 (%)	2020年の漁獲量※ (千トン)
1	100%	45%	314
0.9	100%	70%	291
0.8	100%	89%	267
0.7	100%	98%	241
0.6	100%	100%	213
0.5	100%	100%	184

※最新の資源評価により更新されるため、将来の生物学的許容漁獲量(ABC)を確定的に示すものではない。また、この漁獲量は日本および韓国の合計値である。

シミュレーションによる 2020 年の漁獲量は、今期の資源評価結果によりアップデートされます。